

# パニウム - ナンバー・イレブン・イレブン

## イレブン、イレブン：ダニエル書と黙示録の預言的証言

Jeff Pippenger

2025-08-09

パニウムの研究でこの地点に到達するまでには、私にとって長い道のりがあった。そして「エレブン、エレブン」という題は、ユダ族の獅子が、十一章十一節において神の民の封印の歴史の内的な流れと外的な流れを提示するために、ダニエル書とヨハネの黙示録の双方を調和させたことを強調するためのものである。猶予期間が閉じる直前に、ダニエル書と黙示録に見いだされる十一章十一節の二つのラインによって表された内的および外的な預言史が現在の真理となる時まで封じられていた黙示録の預言の封印を解くようにとの命令が出される。

そして彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封印してはならない。時が近いからである。不義を行う者はなお不義を行わせ、汚れた者はなお汚れたままでおらせ、義なる者はなお義を行わせ、聖なる者はなお聖くあらせよ。」ヨハネの黙示録 22:10、11

猶予期間が終わる直前の「時は近い」と、「イエス・キリストの啓示」の封印が解かれるときの「時は近い」。

イエス・キリストの啓示。これは、神が彼に与え、しもべたちに、まもなく必ず起こることを示すためのものである。また、御使いを遣わし、そのしもべヨハネにこれを示した。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、そして自分の見たすべてのことについて証言した。この預言のことばを読む者、これを聞き、その中に書かれていることを守る人々は幸いである。時が近いからである。黙示録 1:1-3。

ユダ族の獅子が『イエス・キリストの啓示』の封印を解くとき——2023年7月に『真夜中の叫び』のメッセージが到来して以来、彼がそうしてきたように——その封印を解くことには、彼が「パルモニ」、すなわち「驚くべき計数者」または「秘事の計数者」であるという啓示が含まれている。この真理を受け入れないことは、十四万四千人に印を押す試験の過程に不合格となることを意味する。

私はあなたがたに悔い改めのための水のバプテスマを受けている。しかし、私の後に来られる方は私よりも力のある方で、私はその方の履物を持つ資格もない。その方は聖霊と火とであなたがたにバプテスマを受ける。その手には箕があり、麦打ち場を徹底的にきよめ、麦を集めて倉に納めるが、もみ殻は消えることのない火で焼き尽くす。マタイ 3:11、12。

「この精錬の過程がいつ始まるのか私には言えないが、長くは先延ばしにされない。手にふるいを持っておられる方は、その神殿を道徳的な汚れから清められる。彼はご自分の打ち場を徹底的に清められる。」Testimonies to Ministers, 372, 373.

印づけの時が預言的な試験の過程であることを示す預言の記述は、余りあるほど存在する。神の預言のことばを学ぶに際し、正しい方法論または誤った方法論を適用する学び手

の適性と能力に、その試験の過程に基づいていることは明らかである。この真理は、靈感を受けた記録の中にも豊かに示されている。

この四人の若者には、神があらゆる学問と知恵に関する知識と才能をお与えになり、ダニエルには、あらゆる幻と夢を理解する力が与えられた。やがて、王が彼らを召し出すよう定めていた日々の終わりに、宦官の長は彼らをネブカドネツアルの前に連れて行った。王は彼らと語り合ったが、彼らの中でダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに並ぶ者は一人も見いだされなかった。ゆえに彼らは王の前に立った。王が彼らに尋ねた知恵と理解に関するあらゆる事柄において、彼は、国中にいるすべての呪術師や占星術師よりも彼らが十倍まさっていることを見いだした。ダニエル書 1:17-20。

預言解釈における第一の原則は、真理は二人の証言によって確立されるということであり、この原則に確信を持ってない者は自ら失敗を招いている。封印の時ににおける試練の過程には、ダニエルとヨハネが十一章と十一節で示している内的歴史と外的歴史の結びつきを認識することが含まれている。

「黙示録は封印された書であるが、同時に開かれた書でもある。それには、この地球の歴史の最後の日々に起こるであろう驚くべき出来事が記録されている。この書の教えは明確であって、神秘的で不可解なものではない。その中では、ダニエル書と同じ系統の預言が取り上げられている。神はいくつかの預言を繰り返しておられ、それによってそれらが重んじられるべきものであることを示しておられる。主は重要でない事柄を繰り返されることはない。」 Manuscript Releases, 第9巻, 8.

ダニエル書と黙示録は二人の証人を表しており、また十四万四千人は黙示録11章で二人の証人として表されている。同章11節では、エリヤとモーセによって表される二人の証人が、煮えた油に入れられたヨハネと獅子の穴のダニエルによって型示されるように復活する。十四万四千人はダニエルとヨハネ、またエリヤとモーセによって表されている。十四万四千人を生み出す試練の過程に成功するためには、学ぶ者は、真理は二人の証人によって確立されること、ダニエル書と黙示録が二人の証人を表していること、そして十四万四千人がエリヤとモーセ、またダニエルとヨハネとして型示されていることを理解しなければならない。

これらの真理は、『ダニエル書』と『黙示録』の双方において「十一、十一」によって表される内的な歴史と外的な歴史に関わる預言的真理の、ほんの一端にすぎない。パルモニとして、キリストは両箇所を一致させるよう導かれ、また十一に十一を加えると二十二になること、そしてその二十二はさらに二百二十の十一、すなわち十分の一であり、それが神性と人性の結合の象徴であることをも示された。パルモニは、二人以上の証人によって、「二百二十」が神性と人性の結合を表すことを確立された。これはさらに、彼が墮落した肉体を身にお取りになったときのキリストの受肉の描写である。こうして彼は、人類に対し、もし彼らが福音の要求を満たす用意があるなら、キリストはご自身の神性を私たちの人性と喜んで結び合わせてくださるという模範を示された。それゆえ、神性と人性は二人の証人である。

猶予期間が終わる直前に開かれた「イエス・キリストの啓示」には、イエスが神の「ことば」であるということが含まれている。

初めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。この言葉は初めに神とともにあった。すべてのものは彼によって造られた。造られたもので、彼によらずにできたものは一つもなかった。彼のうちに命があった。その命は人の光であった。光は暗闇の中に輝いている。暗闇はこれに打ち勝たなかった。ヨハネによる福音書 1:1-5.

聖書は「神のことば」であり、キリストが神性と人性の結合を体現しているのと同様に、神的なもの与人間的なものの結合をも象徴している。聖書は、旧約と新約という二人の証人を象徴しており、彼らはまた黙示録11章におけるモーセとエリヤでもある。

この二人の証人について、預言者はさらにこう宣言する。「これらは二本のオリーブの木、また、全地の主なる神の御前に立っている二つの燭台である。」詩篇記者は言った。「あなたのみことばは、わたしの足のともしび、わたしの道の光です。」黙示録 11:4; 詩篇 119:105. 二人の証人は、旧約聖書と新約聖書を象徴している。『大論争』 26 7.

二人の証人とは、二本のオリーブの木、二つの燭台、そして旧約聖書と新約聖書のことである。この段落では、旧約聖書と新約聖書は「あなたのみことば」と表現されている。恩恵期間の終わりの直前にユダ族の獅子によって封印が解かれる「イエス・キリストの黙示」は、「知識の最終的な増加」であり、14万4千人の一人となる候補者を試すものである。この「知識の最終的な増加」は、十人の乙女のたとえにおける「真夜中の叫び」のメッセージでもある。

「すると私は答えて彼に言った。『燭台の右と左にあるこの二本のオリーブの木は何ですか。』私はさらに答えて彼に言った。『この二つの金の管を通して自ら金の油を注ぎ出している、この二本のオリーブの枝は何ですか。』彼は私に答えて言った。『これが何であるか、あなたは知らないのか。』私は言った。『いいえ、わが主よ。』彼は言った。『これらは、全地の主のそばに立つ二人の油注がれた者である。』ゼカリヤ書 4章11-14節。これらは自らを金の鉢に注ぎ入れる。それは、人々に警告と懇願をもって主のことばを運ぶ、神の生ける使者たちの心を表している。みことばそれ自体は、象徴されているとおり、全地の主のそばに立つ二本のオリーブの木から注ぎ出される金の油でなければならない。これは聖霊と火によるバプテスマである。これは不信者の魂を開き、確信へと導く。魂の必要は、ただ神の聖霊の働きによってのみ満たされる。人は自分自身の力では、心の渴望と願いを満たすために何ひとつ成し得ない。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第4巻、1180。」

神の言葉は聖書であり、同時にキリストでもある。そして、聖書とキリストは、十四万四千人と同様に、二人の証人を象徴している。この二人の証人はさらに、神性と人性の結合を象徴している。また、彼らは内的小および外的小の預言の歴史も象徴している。証人として、彼らは神性と人性が結び合わされたものは罪を犯さないことを立証した。彼らはまた、神性と人性の結びつきそのものも象徴している。神と人との間の伝達経路を象徴するはしご、導管、管、天使、その他いかなる象徴であろうとも、人に伝えられるメッセージは常に命か死かである。

全地の主のそばに立つ受膏者たちは、かつてサタンに与えられていた守りのケルブとしての地位を持っている。御座を取り巻く聖なる存在たちを通して、主は地に住む者たちと絶えず交信を保っておられる。黄金の油は、神が信者のともしびを満たし続け、揺らいで消え去ることのないようにされる、その恵みを表している。もし神の御霊の告げることばにおいてこの聖なる油が天から注がれなければ、悪の諸勢力が人を完全に支配してしまうだろう。

私たちが神から送られるみ告げを受け取らないとき、神は辱められる。こうして、暗闇の中にいる者たちに伝えられるために、神が私たちの魂に注ぎ込もうとしておられる黄金の油を、私たちは拒んでしまう。「見よ、花婿が来る。出て行って彼を迎えよ」という呼びかけが来るとき、聖なる油を受け取らず、心にキリストの恵みを大切にしていなかった者たちは、愚かな乙女たちのように、自分たちが主をお迎えする備えができていないことに気づくであろう。彼らには、その油を得る力が自分自身の内にないので、彼らの人生は難破してしまう。しかし、もし神の聖霊を求め、モーセがそうしたように「あなたの栄光を私に見せてください」と嘆願するなら、神の愛は私たちの心に豊かに注がれる。黄金の管を通して、黄金の油が私たちに注がれるであろう。「権勢によらず、力によらず、ただわが霊によって」と万軍の主は言われる。義の太陽の輝く光線を受けて、神の子どもたちは世にあって光として輝く。Review and Herald, 1897年7月20日。

ダニエル書および黙示録11章11節によって示される内的・外的な歴史の只中で、聖霊の注ぎが起こる。ダニエル書11章の11節と12節には、特定すべき「少なくとも」四つの預言的な人物が表されている。さらに、13節から15節にも特定すべき四つがあり、16節にも四つある。私たちは今まさにその歴史の中に生きているのだから、預言の学徒として、11節から16節の象徴的な人物が誰なのかを見極める必要がある。というのも、それらは同じ章の40節の隠された歴史を包含する預言の筋を表しているからである。

また、1989年以来解明が進んでいる第40節の歴史において描かれている人物を特定することも、関連があるように思われる。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

第四十節は、終わりの時である1798年、フランスのナポレオンがローマ教皇を捕囚にした時から始まる。ナポレオンの根拠は、1797年のトレンティーノ条約の破棄に基づいていた。ナポレオンと教皇の争いは、ダニエル書11章6節と7節の成就となった歴史の中で、すでに型として示されていた。6節と7節の成就としての婚姻同盟の破棄と、南の王による北の王の敗北は、1798年の歴史の中で繰り返され、そうすることによって、それらは6節と7節における神の言葉の予告と、エジプトの王プトレマイオス二世フィラデルフォスとシリアの第三代の王アンティオコス・テオスとの戦いの始まりにおけるその成就とを表している。プトレマイオスは南の王を、アンティオコスは北の王を表していた。

これらの聖句の予言と、その予言がプトレマイオスとアンティオコスの歴史の中で成就したこと（それはさらに1798年のナポレオンと教皇の歴史を予表した）、そして1798年

のナポレオンと教皇の歴史とを合わせると、十一節と十二節におけるプーチンとゼレンスキーの歴史を予表する三つの筋道が示される。したがって、1798年の終わりの時がナポレオンと教皇の歴史を表しているとして理解するだけで終わるなら、それは不完全である。私たちは、六節と七節がナポレオンと教皇について何を予言しているのか、また同じ時期についてプトレマイオスとアンティオコスの歴史が何を教えているのかを理解しなければならない。これらの真理の筋道を理解すると、それらの以前の歴史的成就が四十節の始まりの歴史を指し示していること、そして同時に、ナポレオンとプトレマイオスによって予表され、六節と七節で予言されているプーチンが十一節と十二節を成就するときに四十節の終わりもまた指し示していることが理解できる。

ヨハネの言うところの「竜」と「獣」、あるいはダニエルが「常の献げ物」と「荒らす憎むべきもの」として表すもの間にある預言的關係についての重要な観察は、それらが預言的に非常によく似ているという点である。ヨハネは次のように述べている。

そして彼らは、獣に力を与えた竜を拝み、また獣を拝んで言った。「誰がこの獣に比べられようか。誰がこの獣と戦うことができようか。」黙示録13:4

竜を礼拝することは獣を礼拝することに等しい。両者は異教を表しているからである。ヨハネと同様に、ダニエルはダニエル書8章9～12節の「小さな角」を用いて、異教ローマと教皇ローマの双方を象徴させている。ただし彼は、異教ローマの小さな角を男性形で、教皇ローマの小さな角を女性形で示すことによって、両者を明確に区別している。7章でダニエルは、異教ローマがそれ以前の諸国とは「異なっている」と述べ、さらに教皇ローマもまた「異なっている」と特定している。ローマは、異教であれ教皇であれ、「異なっている」。異教ローマを表すローマの男性的象徴は、アハブとヘロデによって支持されている。両者はいずれも教皇制を象徴する者と結婚していた。女は教会権力、男は国家権力を表す。したがって、預言のレベルにおいて神の言葉が男と女が一体となることを語る時、それは、異教ローマと教皇ローマが預言的意味において非常に類似しているという現実を確認している。彼らは一つの肉だからである。

1798年におけるフランスの教皇庁との関係は、十人の王がローマを火で焼き、彼女の肉を食らうときの、アメリカ合衆国の教皇庁との関係を象徴している。

あなたが見た、獣の上にある十本の角は、淫婦を憎み、彼女を荒れ果てさせ、裸にし、その肉を食らい、火で焼き尽くす。黙示録 17:16

538年に教皇権を権力の座に据えたときのフランスの教皇権との関係は、間もなく到来する日曜法において米国が教皇権の致命的な傷を癒す働きを象徴している。

また私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。彼には子羊のような二本の角があり、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威をふるい、致命的な傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。また彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から火を地上に降らせた。また彼は、その獣の前で行う力を与えられていたそれらの奇跡によって地に住む者たちを惑わし、地に住む者たちに、剣で傷を受けながら生きのびたその獣の像を造るようにと命じた。黙示録 13:11-14.

1798年の「終わりの時」は、四十節の成就として、靈的な南の王によって靈的な北の王が退けられることを示している。その預言的歴史は、教皇支配の1260年間の終結期の歴史であり、したがって、その預言的歴史の始まりに見られる預言的特徴が終わりにも表されている。538年には聖書の預言の第四の王国が第五の王国に道を譲り、1798年には第五の王国が第六の王国に道を譲った。

538年はまた、アッシリアがエフライムを捕囚とした紀元前723年に始まった、イスラエル北王国に対するレビ記二十六章の「七たび」の呪いの中間の道標でもある。したがって1798年は、538年の預言的特質だけでなく、紀元前723年のそれも備えている。紀元前723年にはイスラエルの十部族がアッシリアによって打ち倒され、1260年後の538年には異教ローマが教皇ローマによって打ち倒され、その教皇ローマもまた「七たび」の終わりにあたる1798年にフランスによって打ち倒された。

1798年、南の王であるフランスは、教皇権を王座から退けた。538年、異教ローマが十の王国に分裂したことの最たる象徴であるフランスは、教皇権を王座に就かせた。日曜法の時、アメリカ合衆国は538年のフランスの役割を繰り返し、十人の王が教皇権を火で焼き、その肉を食らうとき、アメリカ合衆国は1798年のフランスの役割を繰り返す。

イスラエルの北王国と南王国に対する「七回」の裁きは、北から出てきた諸王国によってもたらされた。

イスラエルは散らされた羊である。獅子たちがこれを追い散らした。まずアッシリアの王がこれを食い尽くし、最後に、このバビロンの王ネブカドレザルがその骨を砕いた。エレミヤ書 50:17。

アッシリアは北方から来て紀元前723年に十部族を征服し、バビロンは紀元前677年にユダを捕囚とした。イスラエルはユダに対しては北王国であったが、両王国とも北方の敵に征服されたため、彼らを捕囚にした敵に対してはイスラエルもユダも南方の王国に当たることになる。紀元前723年は、北の王が南の十に分割された王国を征服したことを表している。538年は、異教から教皇制への移行を表すとともに、北方の王国が十に分割された王国を征服したことも表している。1798年は、十に分割された王国を代表する南の王によって北の王が打ち破られたことを表している。

その同じ時刻に大地震が起こり、都市の十分の一が倒壊し、地震で七千人が命を落とした。残った者たちは恐れおののき、天の神に栄光を帰した。ヨハネの黙示録 11:13

ローマが異教から教皇制へと移行した538年に関連する移行期は、ダニエル書8章における男性形から女性形への変化でもあり、象徴的には国家統治から教会統治への移行を意味する。『七つの時』の預言には『真理』の印があり、第一の文字（紀元前723年）はヘブライ文字の第二十二番目にして最後の文字（1798年）を示し、十三番目で中間の文字（538年）は反逆を表している。ダニエルは、「荒廢の背き」という表現で象徴されるその「背き」が、教会と国家の結合であり、その関係を主導していたのは教会であったことを示している。その「背き」は538年を表しており、それはイスラエルの北の十部族に対する「七つの時」の期間における三つの主要な道標のうち中央に位置し、比喩的には第十三の文字に当たる。

1798年、ダニエル書11章40節に示された「終わりの時」において、無神論的なフランス、すなわち南の王が、北の王である教皇権に致命的な傷を負わせた。1989年、教皇権は当時ソビエト連邦となっていた無神論的な南の王に対して報復した。その報復には、アメリカ合衆国とバチカンとの秘密同盟が含まれていた。1989年にソビエト連邦が一掃されたことによって四十節に記された予言的メッセージは終わり、次の四十一節はアメリカ合衆国における日曜法を表している。したがって、1989年のソ連崩壊から次の節の日曜法に至るまで、私たちは四十節の隠された歴史の中を生きてきた。

第40節は、1798年に南の王と北の王を特定することから始まり、次いで1989年には南の王と北の王に加え、戦車、船、騎兵によって表される第三の勢力も示す。

終わりの時には、南の王が彼に攻めかかり、北の王は戦車と騎兵と多くの船を従えて、つむじ風のように彼に向かって来る。彼は諸国に侵入し、洪水のように押し流して通り過ぎる。ダニエル書 11章40節。

1798年の「終わりの時」に、ナポレオン軍の将軍がバチカンに侵入し、教皇を文字どおり捕らえて投獄した。1989年には、1798年への報復が行われた。1798年から1989年までの歴史の中で起こった予言的な転換があり、それに留意することが重要である。1798年の時期における南の王であった無神論のフランスは最初の霊的な南の王であり、プーチン率いるロシアはその最後となる運命にある。フランスは黙示録11章で指し示されており、これはホワイト姉妹が明確に無神論のフランスだと特定している。11章でフランスを示す二つの象徴の一つはエジプトであり、ホワイト姉妹はそれを無神論の象徴だと特定している。同章において、底知れぬ穴から上ってくる獣は、その時期に歴史に登場した無神論を指していた。

無神論は1798年ごろのフランスを起点として歴史に登場し、1989年までには無神論の霊的な王はソビエト連邦となっていた。1989年に、教皇ヨハネ・パウロ二世とロナルド・レーガンの間の秘密の同盟の成就としてソビエト連邦が一掃されたことは、ダニエル書11章10節において型として示されていた。また、その10節に対する第二の証は、イザヤ書7章から11章に記されている、イスラエルの北王国と南王国に対する二千五百二十年の二つの呪いの箇所に見いだされる。

したがって、1989年は終末の預言の謎を解くための基準点となる。そのときに四十節の封印が解かれた。今では、四十節は1798年に始まり、四十一節の「日曜法」で終わることが明らかになっている。

日曜法の時に、アメリカ合衆国は竜のように語り、聖書の預言における第六の王国としての支配を終えるだろう。その支配の時は、第五の王国が致命的な傷を受けた1798年に始まった。1798年、アメリカ合衆国は外国人・治安諸法を可決し、こうして、その始まりにおいて第六の王国の終わりを象徴した。ゆえに、第四十節は、聖書の預言における第六の王国としてのアメリカ合衆国の歴史である。

1798年はヘブライ文字の第一の文字であり、日曜法はヘブライ文字の第二十二番目で最後の文字であり、1989年はその中間の道標で、十三という数とヘブライ文字の十三番目の文字によって象徴される反逆を表している。1989年は、聖書の預言における反キリスト

とレーガンの秘密同盟による反逆を表している。1989年は、憲法に対する反逆がエスカレートする時期に在任する最後の八人の大統領のうち最初の者を登場させる。1989年は、セブンスデー・アドベンチストの間で、礼拝者を二つの階級に生み出すことを意図した試練の過程を開始した。忠実な者は少数で、不忠実な者は多数である。1989年は四十節の中央の道標を表し、またヘブライ文字の十三番目の文字で象徴される反逆を表している。四十節は「真理」の署名を帯びている。

第40節には、節の終わりの歴史では異なる北の王と南の王が登場する。さらに、ヨハネによれば、アメリカ合衆国は竜と獣と共に働いて世界をハルマゲドンへ導く偽預言者である。第40節における南の王は竜、北の王は獣であり、戦車、船、騎兵は偽預言者である。1989年における第40節の成就是、11節から15節を理解するうえで重要な預言的要素となる。1989年について正しくなければ、私たちが今日置かれている歴史について論理的に正しい判断はできない。

1989年から日曜法に至るまで、教皇制のための三つの代理戦争が、10節から15節において表されている。これらの節は一続きの歴史として考えられなければならない。というのも、10節から15節の歴史的成就において示されている三つの戦いのすべてに、同じ「アンティオコス・マグヌス」が見いだされるからである。

三つの戦いは一つの預言的な筋である。というのも、アンティオコス・マグヌスがその三つの戦いすべてに関わっていたからである。第十節とイザヤ書8章8節は、1989年における第四十節の成就について二つの証しを与えている。第十節とイザヤ書8章8節における参照点は第四十節である。「戦車、船、騎兵」は、黙示録13章の地から上ってくる獣の二本の角を表している。終わりに、アメリカ合衆国が「竜のように語る」とき、その二本の角はもはや共和主義とプロテスタントイズムではない。その時、いわゆるプロテスタントはカトリックと結び、立憲共和国は独裁制へと変えられる。その時期、地から上ってくる獣の二本の角は経済力と軍事力となる。黙示録13章では、アメリカ合衆国は、売り買いの条件として、また死をもって脅して、世界に獣の刻印を受け入れさせる。その二本の角とは、ダニエル書にいう「船」が経済力を、「騎兵と戦車」が軍事力を表すことである。

1989年は、11節から15節におけるラフィアとパニウムとの戦いの歴史的成就を適用するには、10節から15節に描かれている三つの戦いすべてにアンティオコス・マグヌスが現れているため、1989年とソ連崩壊を理解するために用いられたのと同じ預言的手法を用いなければならないことを示している。アンティオコスは戦車、船、騎兵の力を表しており、1989年にはこの力はロナルド・レーガンで、彼は八人の大統領の最初の者であり、その最後の者はまた第六でもあり、そして今や七人に属する第八である。

イザヤ書二十三章によれば、教皇権（地の王たちと姦淫する淫婦）は、聖書の預言における第六の王国としてのアメリカ合衆国の支配の時代には隠されるだろう。1989年、アンティオコス・マグヌスになぞらえられていたアメリカ合衆国は、1798年に教皇権に致命的な傷を与えた無神論の獣に対する戦いにおいて、教皇権の代理勢力であった。

10節から15節に記される三つの戦いは、北の王と南の王との戦いを表している。北の王はツロの隠れた淫婦として、自らの力の回復と無神論の王、すなわち南の王の打倒へと進む中で、代理勢力を用いる。10節から15節の三つの戦いの歴史的成就是、最初と最後の戦

いではアンティオコス・マグヌスが勝利し、中間の戦いでは彼が敗れたことを私たちに教えている。ロナルド・レーガンと教皇ヨハネ・パウロ二世、そしてソ連の崩壊に関する1989年の預言的特徴は、三つの戦いの最後のものにおいて対応物を持つだろう。というのも、これらの節こそが、猶予が閉じる直前に封印が解かれるものだからである。40節が1798年に、そして再び1989年に封印が解かれたように、その節は終わりにおいても封印が解かれ、2023年7月から始まった。

イエス・キリストの黙示は、恩恵期間が閉じる直前にその封印が解かれ、そこには、イエスが初めであり終わりであるという卓越した真理、すなわち、そのゆえに常に初めをもって終わりを例証されるという真理が含まれている。アドベンチズムにとって恩恵期間が閉じるのは日曜法の時であり、その直前にイエス・キリストの黙示の封印が解かれる。日曜法という閉ざされた戸のところで終結するメッセージは、ミラー運動の歴史において1844年10月22日の閉ざされた戸へと導いた「真夜中の叫び」のメッセージである。四十節の初めにおける1798年の開封は、聖書預言における第六の王国としてのアメリカ合衆国の始まりでもあり、四十節の中間における1989年の開封と、アメリカ合衆国の漸進的な終焉の開始を予表した。1989年を予表した1798年の開封は、2023年における「真夜中の叫び」のメッセージの開封に対する二人の証人を表す。1798年、1989年、2023年という三つの道標を持つこの一本の線は、十人の乙女を清める内的な働きと、聖書預言における第六の王国の外的な歴史線とを指し示している。

十一節に示され、アンティオコスがプトレマイオスに敗れたラフィアの戦いで成就したその戦いは、教皇の代理勢力の敗北を表しているが、この現在の戦いにおいてその代理勢力とは、EUとNATOを構成する西欧のグローバリスト諸国と同盟し、国連の政治的・経済的グローバリストと歩調を合わせているウクライナのナチスである。もしアンティオコス・マグヌスが三つすべての戦いに関与し、南の王に対する教皇の代理勢力を表しているのだとすれば、どうしてそれが1989年にはアメリカ合衆国であり、次にラフィアの戦いに典型づけられる形ではウクライナ人であり、そしてパニウム（Panium）の戦いでは再びアメリカ合衆国だと言えるのか？ 十節は十一節から十五節への鍵である。というのも、1989年におけるその成就が、三つの代理戦争のうち最初のもの（1798年）の予言的特性を例証しているからである。アンティオコスを教皇の代理勢力と同定する一方で、三つの戦いそれぞれにアメリカ合衆国を適用しないということについて、どのような予言的根拠があるのか？

ラフィアの戦いによって象徴されてきたウクライナ戦争の歴史において、アメリカ合衆国はウクライナのナチスを自らの代理勢力として用いたが、それは、汚れ仕事をさせるのに常に、もっぱら代理勢力しか用いない権力である教皇制のイメージを彼らが形作っている、まさにその同じ歴史の中でのことだった。

10節から15節における代理勢力の問題に答えるためには、象徴としてのアンティオコスの特質についての預言的研究が必要となる。ディアドコイ戦争は、紀元前323年から紀元前281年にかけて、ディアドコイ（ギリシア語で「後継者たち」）すなわちアレクサンドロス大王の将軍であり後継者たちが、彼の死（紀元前323年）後にその広大な帝国の支配権をめぐる争った一連の戦いである。初代アンティオコスはアンティオコス1世ソーテルであり、セレウコス朝を創始したアレクサンドロスのディアドコイ（後継者）の一人セレウコス1世ニカトルの子であった。

アンティオコスという名は、支えるために代わって立つ者という意味に理解できる。アンティオコスはローマの象徴であり、教皇ローマは反キリストで、アンティオコスと同様の象徴性を帯びている。アンティオコスという名はセレウコス朝の建国者の子を指しており、その意味でアンティオコスは父に代わって立ち、代理としての立場にあった。ホワイト姉妹はサタンと教皇の双方を反キリストとして挙げ、教皇は地上におけるサタンの代理人であると述べている。この名はセレウコス朝で広く用いられる王家の名となったが、その一因は、アンティオコス1世ソテルおよび、セレウコス1世の父または息子にちなんで名づけられたアンティオキアの都市との結びつきにある。教皇はサタンの代理であり、象徴的に言えば、アンティオコスという名は、首都をバビロンに置いた北方の王国の創始者である彼の父の代理を表している。

紀元前323年にアレクサンドロス大王が死去すると、その帝国はディアドコイ（後継者）たちの間で分裂した。バビロン分割（紀元前323年）では、セレウコスは当初、アレクサンドロス帝国の摂政ペルディッカスのもとで、コンパニオン騎兵（名誉ある軍職）の司令官に任命された。紀元前321年には、トリパラディソスの分割において、ペルディッカスの死とディアドコイ間のさらなる協議を受けて、セレウコスはバビロニアのサトラップ（総督）に任命された。紀元前316年には、別のディアドコイであるアンティゴノス1世モノフタルモスが勢力を拡大したため、セレウコスはバビロンからの逃亡を余儀なくされた。セレウコスはエジプトのプトレマイオス1世ソテルのもとに身を寄せた。紀元前312年、セレウコスはプトレマイオスから与えられた小勢を率いてバビロンに戻った。彼はアンティゴノスの軍を破ってバビロンを奪還し、これによって彼の権力基盤が確立された。この出来事はしばしばセレウコス朝の成立と見なされ、歴史年代ではセレウコス紀元の起点を紀元前312年とする。

Seluecus という名はギリシア語に由来し、「光」「輝き」「炎」を意味する語根 selas (σέλας) から来ている。この名は輝きや光明を想起させ、Seleucid Empire の創設者であり、天上で光の担い手であった父を体現する者でもある Seleucus I Nicator のような著名な人物にふさわしい。

世の利得と名誉を確保するために、教会はこの世の有力者たちの好意と支持を求めるように仕向けられ、こうしてキリストを退け、ついにはサタンの代表者-ローマの司教-に忠誠を誓うに至った。『大論争』、50。

アンティオコス・マグヌスは教皇権力の代理を象徴しており、教皇がサタンの代理を象徴しているのと同様である。アンティオコスの象徴性は、さまざまな代理権力を許容しており、多くの教皇が存在してきたのと同じである。1989年の代理はレーガンであり、2014年にはウクライナがアメリカ合衆国の代理となり、トランプはパニウムの戦いにおける代理である。レーガンが最初で、トランプが最後、ゼレンスキーはその中間の反乱である。